

## 27. 食用野生きのこの人工栽培試験

### (3) ヌメリスギタケモドキ栽培試験

桃澤邦夫

#### 〔目的〕

既述(1) ムキタケ栽培試験と同じ。

#### 〔方法〕

- ① P P (利フピル) 袋栽培試験
- ② 間伐材利用の P P (利フピル) 袋栽培試験
- ③ 間伐材利用の原木栽培試験

上記の試験内容及び方法は前項(2) ヌメリスギタケ栽培試験(その1)と同じである。また、同様に引き継ぎ試験である。供試した菌株は当場に継代培養している2系統の菌株を用いた。

#### 〔結果〕

試験区の区分と子実体の発生時期を表-1に示す。既存の発生調査からヌメリスギタケ同様に春秋の二期発生の性質を持ち不時栽培に好適な性質であろうと思われるが、今年度は昨年度に引き続き春季の発生はみられなかった。秋季の発生は前期のヌメリスギタケ同様早期に始まったが、低調であったせいか短い期間に終わった。

#### 1. P P (利フピル) 袋栽培試験

'91(H3)年度から今年度まで6ケ年の各試料の発生状況を図-1に示した。丸太1本区は接種当年から発生をみたのに対し、他は翌年春からの発生となっている。菌の蔓延の早いと思われる丸太半割区が早期に発生に至る傾向はみられなかった。丸太1本区は初発は早かったものの以後3回の発生をみた後、ここ3年間は全く発生していない。

今年度の発生は低調だった昨年度を発生試料数及び1試料の発生量ともに下回った。本種の場合もヌメリスギタケの場合と類似しており、昨年度の年報でも触れたが短木ほだ木の収穫年限は4年程度が限度であると思われる。

形態区分別に集計した平均発生量を図-2に示す。単年度では試料間のバラツキがより大きいので、図-2の6ケ年累計値で各区試料の平均発生量について検定したところ、いずれの区分間相互においても10%レベルでも有意差はみられなかった。

#### 2. 間伐材利用の P P (利フピル) 袋栽培試験

4ケ年の各試料の発生状況を図-3に示した。今年度はそれぞれ10試料のうち、『五日市-1』は2試料、『檜原-1』は1試料の発生で量も少なかった。

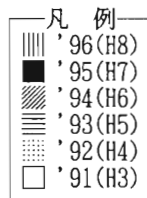
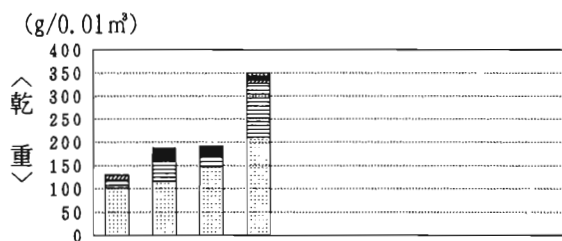
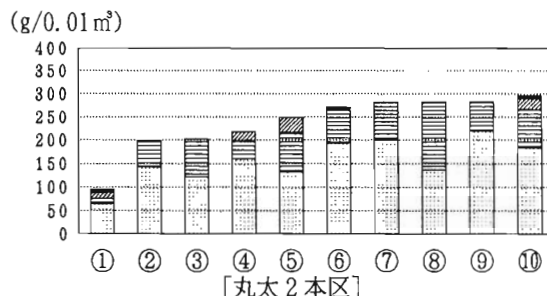
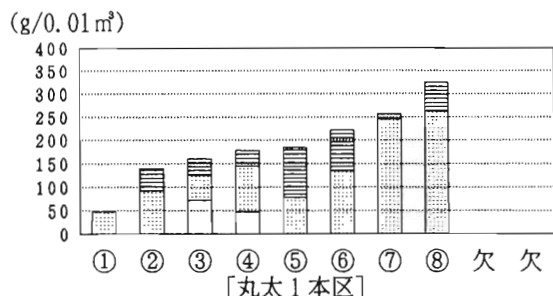
菌系統別に集計した平均発生量を図-4に示す。前記同様、単年度ではバラツキが大きいため4ケ年累計値で各区試料の平均発生量(乾重)について検定したところ、1%レベルで有意差があり、現時点においては『五日市-1』の発生が活発である。これは『檜原-1』が4ケ年のうち主な発生が1年しかなかったことが影響していると思われる。

本試験における子実体の乾燥歩留をほだ木形態別とスギ間伐材利用の双方を統合して表-2に示した。'91(H3)～'93(H5)では概ね12%前後であるが、'94(H6)年度以降には値の変動が大きくなっている。このことは、前記のマイタケの項と同様な傾向を示しており、乾燥歩留が安定から変動に転じたのは、試験の引き継ぎ以降のことである。

表-1 ヌメリスギタケモドキの栽培試験区及び各年度の子実体発生時期

栽培方式	菌系統	発生試験対象木			接種	埋土	発生時期					
		樹種	形状寸法	供試数量			'91 (H3)	'92 (H4)	'93 (H5)	'94 (H6)	'95 (H7)	'96 (H8)
PP袋栽培 ①試験	檜原1	コナラ	φ6.9~8.0 平均7.4cm L=25cm	丸太1本 8組: 0.0110m <sup>3</sup>	'91 (H3) 10/23 ~ 7/3 11/18	'91 (H3) 10/23 ~ 7/3 11/18	11/10	4/27~ 7/3 10/15~26	5/7~ 6/7 10/21~ 11/5	発生 なし	発生 なし	発生 なし
		コナラ	φ5.8~7.4 平均6.6cm L=25cm	丸太2本 10組: 0.0224m <sup>3</sup>			発生 なし	4/27~ 6/16 10/19~26	5/ 7~27 11/2~5	4/ 14~27 12/1	10/24 ~ 11/14	10 /14
		コナラ	φ7.5~8.8 平均8.1cm L=25cm	丸太半割 2本 4組: 0.0065m <sup>3</sup>			発生 なし	4/27~ 6/2 10/19~26	5/7~ 6/7 11/5	4/14 11/10	10/24 ~ 11/14	10/ 14 ~25
間伐材利用PP袋栽培 ②試験	五日市1 檜原1	スギ	φ6.7~10.0 平均8.5cm L=25cm	10本: 0.0185m <sup>3</sup>	'93 (H5) 7/9	'93 (H5) 10/7	—	—	10/28 ~ 11/5	5/30 10/30 ~11/5	11/14	10 /15
		スギ	φ5.4~11.3 平均8.1cm L=25cm	10本: 0.0170m <sup>3</sup>			—	—	発生 なし	10/31 ~11/7	発生 なし	10 /11
間伐材利用原木栽培 ③試験	五日市1 檜原1	スギ	φ6.6~10.5 平均8.5cm L=90cm	10本: 0.0662m <sup>3</sup>	'93 (H5) 4/22	該当 なし	—	—	発生 なし	発生 なし	発生 なし	発生 なし
		スギ	φ8.0~11.8 平均9.5cm L=90cm	10本: 0.0822m <sup>3</sup>			—	—	発生 なし	発生 なし	発生 なし	発生 なし

PP袋栽培はオートクレーブ 1.2気圧, 120℃, 70分滅菌後、種菌100g/袋接種  
発生時期の期日は収穫日



① ② ③ ④ 欠欠欠欠欠欠欠  
[丸太半割2本区 (=丸太1本換算)]

被接種樹種: コナラ

図-1 <①試験>ヌメリスギタケモドキPP袋栽培における各試料の子実体発生量

### 3. 間伐材利用の原木栽培試験

今年度も発生をみなかった。試験を開始以来、『五日市-1』、『檜原-1』の2系統ともまったく発生していないことになる。

改めて図-2と図-4を比較してみると、ともにPP袋栽培であるが年次が異なり条件は違うものの、4ヶ年の累計でスギに接種したものはコナラに接種したものに比べ、1/4以下くらいの量しか発生していない。また、間伐材利用の原木栽培試験では発生をみないことからヌメリスギタケモドキ原木栽培へのスギ材の使用は不適と思われる。

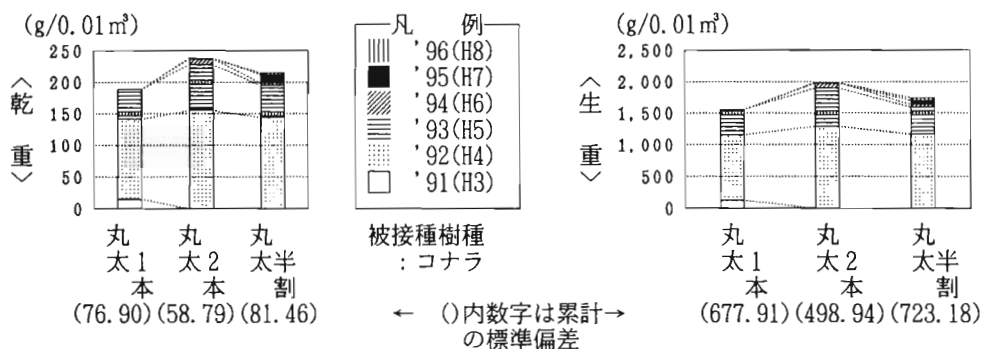


図-2 <①試験> ヌリスギケドPP袋栽培における子実体平均発生量〔1試料0.01m<sup>3</sup>当たり換算値〕

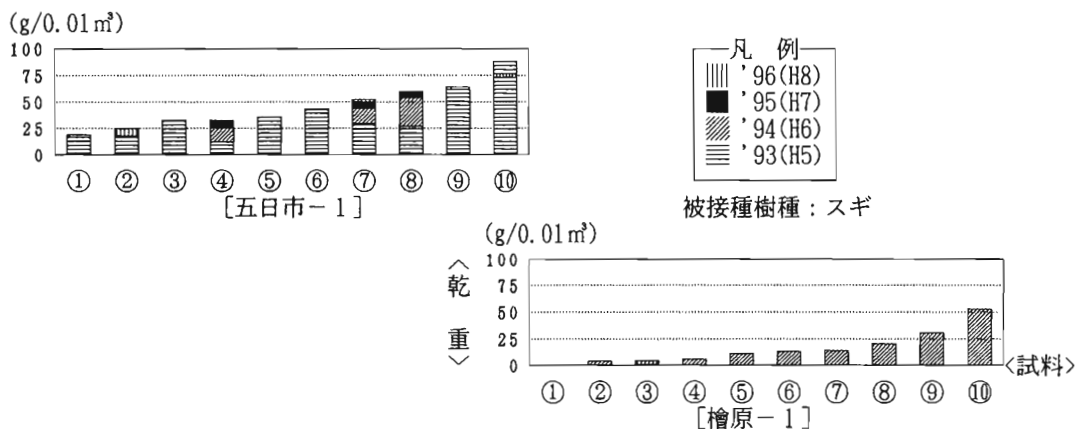


図-3 <②試験> ヌリスギケド材間伐材PP袋栽培における各試料の発生量

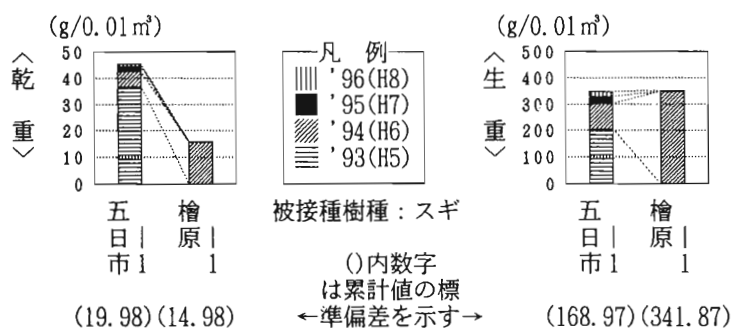


図-4 <②試験> ヌリスギケド材間伐材PP袋栽培における平均発生量〔1試料0.01m<sup>3</sup>当たり換算値〕

表-2 <①, ②試験> ヌリスギケド子実体歩留係数

PP袋栽培試験	コナラ短木 (ほだ木形態別)			スギ間伐材短木		
	丸太1本	丸太2本	丸太半割	五日市-1	檜原-1	
発生年度	'91(H3)	12.0	発生なし	発生なし	—	—
	'92(H4)	12.2	12.0	12.3	—	—
	'93(H5)	12.0	12.0	12.0	18.0	発生なし
	'94(H6)	発生なし	11.4	8.3	5.4	4.5
	'95(H7)	発生なし	16.6	22.4	8.2	発生なし
	'96(H8)	発生なし	5.2	6.5	4.6	6.5

(乾重量/生重量, 単位%)